

保護者の皆様へ

学生相談室長 田村修一

秋も深まり、舞鶴は雪の季節も近くなってまいりました。高専祭、また4年生の海外研修旅行が終わりますと、本校の主な学校行事は終了し、学生たちは後期の中間試験、期末試験に臨み、成果をあげて進級、また5年生は卒業にむけてまっしぐら、という時期となります。

日本では数年前から学校における「9月1日」の問題がクローズアップされるようになりました。学齢期における児童・生徒の自殺者の統計をとってみると、9月1日がピークとなるという結果が出たからです。長期休暇の休み明けが児童・生徒にとって、自殺のリスクの最も高い時期であるということが判明しました。それに次いで、年度当初の時期の4、5月のリスクが高いことが明らかとなっています。

高専の場合、長期休暇明け、年度初めと同様に、メンタルヘルスに気をつけなければならない時期が今からの時期、すなわち高専祭明けから年度末にかけての時期であるように思われます。実際に学生に接し、話してみると、この時期、「留年」に対する不安を増幅させている学生が多くなっていることが見て取れます。

ヨーロッパの国々の中には「留年」に対するネガティブな感覚が全くないどころか、学力が伴わないのに無理に「進級」させると、保護者からクレームが来る地域があるとも聞きます。しかし日本の場合は留年に対するネガティブな意識が強く、特に高専の場合、大学生より年齢の低い、より感じやすい時期のハイティーンの学生がほとんどですので、その不安・ストレスは相当に大きいものと認識しなければなりません。

工業の分野は、人々の生命や安全に直接かかわる分野でありますから、私が通っていた文科系の大学のように、適当なところで単位を認定、というわけにはいかないようです。確かな知識と技術を習得したと認定できる者でないと、卒業生として産業界に送り出すわけにはいかない事情があります。

高専は「高等教育機関」であることから、これまで「高校などより自由な校風」と引きかえに、自主性を強調しすぎる面もあったかと思われます。しかしながら、そういう面はもう改めていこう、できるだけ留年や退学を少なくしていく努力を、教員はこれまで以上にしていこう、という気運が高まっています。「気運」だけではなく、留年や退学を少なくしていくための施策が、具体的に進められている現況です。

「学生相談室」も、カウンセラーの来校日を増やすなどした結果、相談件数は増えています。悩める学生が増えた結果、と言うよりは、相談室利用の敷居が低くなって、より相談しやすい環境になったからと、ポジティブにとらえています。「相談」だけではなく、マンガ本などの蔵書も増やして、くつろげるスペースを確保し、また各種心理テストも用意して、「ちょっと心理テストを受けてみたい」という動機でも（一人でも友達同士でも）利用できる体制となっています。

悩める人間にとっては、悩みそのものが解決されればそれでいいようなものですが、より根本的に重要なことは、自分の思いをしっかり受け止め、聞いてくれる人が存在していることを、自覚できることだと思います。

高専は高度な工業系の専門教育が展開されていることから、進路変更を選択せざるをえない学生が一定の割合で出ることはいたし方ないとも思われます。しかしそのような学生を含め、すべての学生がかげがえのない存在であることに変わりはありません。

教職員また保護者の皆様の総力をあげて、学生たちをサポートしていく努力を不断に続けなければと思っております。